

作品タイトル 「シンデレラの憂鬱」

元にした作品のタイトル 童話「シンデレラ」

この作品の著者名 裏木戸 夕暮

140 文字以内のあらすじ 両親が離婚して優しいママを失った絵麗奈。父の再婚により厳しい継母との暮らしが始まる。年月が流れ、自らも女の子の母親となった絵麗奈は理想の子育てをするが、その結果は望んでいた姿とは違った。

本編の文字数 (スペースを含む) 3518 文字

(スペースを含まない) 3483 文字

ふかふかのベッドで迎える朝。鼻をくすぐる香ばしい匂い。テーブルに着くとママが

「おはよう」

とにっこり笑ってパンケーキにお手製のイチゴソースをかけてくれる。

(ああ、幸せ・・・)

次の瞬間。盛大な音量でアラームが鳴り響き、夢が砕け散る。

目を覚ました絵麗奈は指先で涙の跡を拭う。幸せな夢は2年前までは現実だった。

今は跡形も無い。

パジャマのまま部屋を出ようとして慌てて部屋着に着替える。そうしないと継母に怒られるからだ。キッチンへ向かうと、テーブルに並んでいるのは玄米ご飯と味噌汁と焼き鮭。夢とはなんという違いだろう。

「いただきます」

「その前に顔を洗いなさい」

「はい・・・」

毎日何か一つは継母に注意される。

顔を洗ってテーブルに戻ると、入れ替わりに父が立ち上がった。

「今日はもう出る」

「午前中から会議よね。行ってらっしゃい」

食卓から父が退場。継母も

「私ももう出るわ。食器洗いと洗濯と掃除をお願いね。夕食はレシピ本に菜を挟んであるから。材料はあるから買い出しはいいわ」

そう言いながらエプロンを外しジャケットを羽織る。絵麗奈はひとり、家に残される。

(昔なら。こうして座ってパンケーキを食べていると、ママが後ろから髪を可愛く結び上げてくれた。パパが会社に行く時も、ママは玄関で手を振ってお見送りしてた)

両親は2年前に離婚し、優しいママは家を出て行った。しばらくは祖母が通いで家事を担ってくれたが間もなく他界。父親が半年前に再婚して新しい母親が出来ると、絵麗奈の世界は一変した。

継母は父の会社の同僚で年齢も父と同年代。しっかりとしたキャリアウーマンといった感じで、仕事は出来るが女性らしい柔らかさには欠けている・・・と、絵麗奈は思う。居なくなった実母とのギャップが激しい。

(ママは、まるで優しい魔法使い。ママが居るお家は居心地が良くて可愛さに溢れて

いて、料理も絵本に出てくるようなご馳走ばかりだった)

継母は意地悪な魔法使い。家事の一切を絵麗奈に押し付ける。料理の献立も煮物や玄米といった年寄り臭いものばかり。掃除や洗濯のやり方にも拘りが強く、少しでも指示と違うとお説教される。

「はぁ・・・さて、言われたことを済ませておかなくちゃ」

絵麗奈は部屋からぬいぐるみを持ってきてテーブルに並べた。

「頑張るから見ててね、ネズミさんトカゲさん」

継母によって不幸になった絵麗奈は、自分をシンデレラになぞらえている。

(辛い日々でも一生懸命頑張って、いつか王子様と結婚するの。でも私の物語には続きがあるわ。結婚して女の子が生まれたら、私はママのような優しいママになって、娘をうんと可愛がるの。お姫様のように可愛く育てるのよ)

やがて絵麗奈の夢は現実になった。お城のパーティーではなかったが、友人の披露宴に招待されて受付係を任された。そこで新郎の友人に見染められ、交際を経て結婚した。待望の女の子に恵まれ、絵麗奈は思い描いていた優しいママになった。ハチミツのように甘い生活が続いた。

娘が生まれて 22 年の月日が流れた。

(あら・・・?)

絵麗奈は気づく。

(おかしいわ。私が描いていたのは、こんな世界だったかしら)

甘やかされてデリケートに育った娘は、就活に失敗して実家に戻ってきた。今は時々アルバイトをする程度。お小遣い程度の収入は自分の趣味に使ってしまい、実家にお金を入れることはない。

可愛く女の子らしく育てた筈だった。だが現実の娘は小太りで肌も荒れている。幼い頃に手作りお菓子をたっぷりと与えられて育った娘には、ストレスを甘いもので発散する習慣がついてしまった。その姿に絵麗奈は愕然とする。

(結婚前の私にそっくりだわ)

両親が離婚したのは絵麗奈が大学生の頃だ。自分が就活に失敗したのは親の離婚がメンタルに影響したからだと思っていたが、そうではなかった。学生時代にろくにアルバイトもせず世間の風に触れなかった性格の甘さが、採用されない原因だった。

そして理解する。

それを矯正してくれたのが意地悪な魔法使い、継母だったと。

(継母の考える献立が変わってから体も痩せたし肌も綺麗になった。家事を任せられるうちに物事の段取りを考えるのが上手くなった。外見も内面もすっきりした頃にアルバイトから正社員に登用され、友人も出来て夫とも出会えた)

今は絵麗奈も五十を過ぎ、少しは人間というものが分かってきたつもりだ。

(優しいママは優しかった訳じゃない。周りに“優しいママ“と言われたかっただけだ)

ふと思い立ち、父親に連絡を取った。今まで頑なに教えてくれなかった離婚の理由を尋ねる。父親は電話の向こうで深くため息をついた。

<お前もいい大人だ、もう話しておこう。理由は向こうの不倫だよ。『運命の王子様に出会ったの!』と言ってな。相手は20代のホストだった。ママのことが大好きだったお前には言えなかった>

父親は話を続ける。

<浮気だけじゃない、あいつは金遣いも荒かった。父さんはそこそこ稼いでいたから良かったが、洋服代や美容院には毎月何万も掛けていたし、食材も無駄に高いものを買っては余らせて捨てていた。悪人だった訳じゃない。だから憎むとまでは言わない

が、新しい母さんと結婚してなんだかほっとしたよ。厳しい人だと感じたかも知れないが、彼女がお前を躰け直してくれて有り難かった。・・・ところでどうした？何か、昔のことで気になることでもあったのか>

「ううん。いいの・・・ありがとう」

通話を終える。ガラスの靴が砕けるように、優しいママの偶像が壊れていく。

(自分はなんという愚かな真似を。上辺だけの甘ったるい子育てを模倣して、娘をあんな風に育ててしまった。意地悪な魔法使いは、本当は良い魔法使い。正しかったのは継母の方だ)

継母は絵麗奈の結婚後に事故で急死した。生きていれば、絵麗奈の子育てに苦言を呈してくれただろうか。

「なんとかしなくちゃ・・・」

このままでは娘の彩綾は実家に寄生し続ける。シンデレラは自分で幸せを掴みに行ったからハッピーエンドなのだ。娘のように家の中で縮こまって、口を開けて上を向いていても幸せは降っては来ない。

振り返れば分岐点は幾つかあった。娘が幼稚園の頃、夫から娘に甘過ぎないかと注意された。当時は

「私は優しいママになるのが夢だったのよ！」

と突っぱねてしまった。以来夫は子育てに口を出さなくなった。娘は父親との接点が少ないまま成長し、大人の男性に対する耐性がつかなかった。弊害は小学校に上がったから現れる。幼稚園に比べて小学校の先生には男性が多い。男の先生がちょっと大きな声を出しただけで怯えるようになってしまった。

(あれが全てとは言わないが、学校への苦手意識が芽生えるきっかけになったのかも知れない)

中学で娘は不登校になった。その後なんとか私立の高校、大学へと進んだが、高い学費を掛けた結果が現在の姿だ。

(中学の頃は周囲の環境が悪く思っていた。でも娘にも原因はあったのかも知れない。甘やかして育てた娘は、気が利かないし空気が読めない所がある。今思えば自分自身もそうだった。それを改善してくれたのが継母だったのだ)

絵麗奈は娘の部屋に向かった。二階への階段を登る時スリッパの片方が脱げて転げ落ちたが、絵麗奈は無視した。

娘の部屋のドアが少し開いている。室内にはレースのカーテン、ピンクのクッション、棚に雑然と並ぶキャラクターものやぬいぐるみ。成人した女性の部屋としてはちぐはぐな印象を受ける。娘は灰被りならぬ布団を被って丸まっていた。毎晩 12 時過ぎ

まで夜更かしするから昼間は眠いのだ。

「彩綾ちゃ・・彩綾、話があるの」

布団の山がモゾモゾと動く。

絵麗奈は喉の奥で言葉を選ぶ。どう言えば、この子の心に響くだろう。感情的になつてはいけない。強い言葉をぶつけても心に鎧を着せるだけだ。

絵麗奈はドアの前に座り込んだ。廊下のフローリングが足に冷たい。

「昔々、あるところに女の子がいました・・・」

自分の過去をありのままに語ってみよう。

(私もママと同じ、甘い毒親)

娘の呪いを解くには自分が変わらなければならない。優しい甘い魔法使いから、意地悪で正しい魔法使いへ。

(もしも魔法が使えるならば時間を巻き戻したい。でも、私にはこんなことしか出来ない。今からでも変わって欲しい。そうしてみんな、いつまでも幸せに暮らしました・・・なんて、現実にはあり得ないのだから)

絵麗奈は語り続ける。娘としての過去、母としての願い。

その時娘の彩綾は、布団の山の中でイヤホンをして動画を見ていた。タブレットの

中には途切れることのない非現実の御伽話が溢れかえり、母の言葉が届くことは無かった。